〔風俗通十〕麓

謹按、尚書堯禪舜納于大麓、麓林屬於山者也、春秋沙麓崩、傳曰、麓者山足也、詩云、瞻彼旱麓、易稱卽鹿無虞、以從禽也、

〔新撰字鏡木〕麓力穀反、不毛山足、

〔類聚名義抄三木〕蓺音祿、フモト、　麓正　〔同五山〕岐崥山足、フモト、　麓山ノフモト　豈欺掃反、山ノフモト

和キ　〔同六土〕扶俗扶字、フモト、　址フモト

〔伊呂波字類抄不載地〕麓フモト、山也、山足也、古文作蓺、　趾　祉　址

〔東雅二地輿〕麓フモト　古語にはハヤマといふ、日本紀の註に、麓讀てハヤマといふこれ也、ハとは端也、舊說に、ハヤマとは、山の淺きといふなりといへり、これ山に入る事の深からぬ義なり、ヤマのハナといふにはヤマノハは、山の末などしるせり、梢を木末といふ事の如し、倭名鈔には、麓讀てフモトといふ、フモトとは踏初なり、山にのぼる初なるの義也、初の字、古訓モトといふ、本初の義なるべし、

〔倭訓栞中編二十七也〕やまもと　麓をいへり、山本の義、中臣祓詞にも、高山の末、短山の末といふ、末は巔末の義、山上をいふなり、

〔類聚名物考地理十四〕山端　やまのは

やまのはじなり、山端を、義訓にやまのまともよめり、はやまも端山にて、奥山にむかへていふなり、また物にはじたといふ詞あり、たらはぬ半分なるをも云へり、はやまもはした山の意にて、半山とも書くべき歟、延喜式の祝詞に、多く短山といふ詞有り、是も同意にて、はした山なるべし、或人は、短山をみじかやまとは訓ずして、はやまと訓べしとさへいへり、されどもかゝる詞、たやすくは定め難し、よく思ふべし、

〔倭名類聚抄一山谷〕谿谷　爾雅云、水出山入川曰谿、古奚反、又作溪、和名太爾、下同、水與谿相屬曰谷、音穀、一